特集

100年後にのこしたい

北近江100(+3)のええもん

「編」とは、文字を書いた細長い竹や木の札を順次に綴じてゆくこと、一片ずつを編んでゆくことをいう。（『常用字解』）

この小さな雑誌の一片を編むために、幾人が動き、いくつの言葉が交わされ、何枚の記録が焼き付けられたことだろう。知ってたつもりが、分かることになるよろこびを、なんと感じさせてもらったろう。一片のなかに綴られたあれもこれも、北近江の土壌としてこの地に伝えていきたい。一片を寄せて北近江という花を大きく咲かせたい。そんな思いを、読者のみなさまからの声とともに、100年後にのこしたい北近江100のええもんとして掲げましょう

*編は（ラスもんプロジェクト）に挑戦したいという人からのコメントでまとめた初期関連号は「えもん」と表記されていますが、本誌では「ええもん」の表記に統一しました。また、読者の皆さまからの「編」の中の「扁」の部分が「扁」と「扁」の両方の表記があるようですが、本誌では「扁」に統一しました。なお、「編」の「扁」の部分は「扁」と「扁」の両方の表記があるようですが、本誌では「扁」に統一しました。

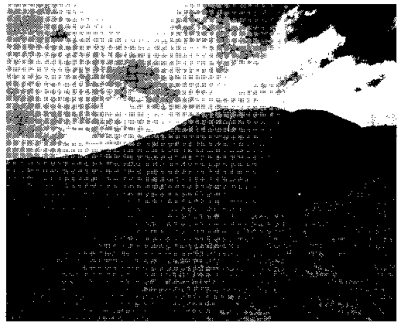
▲湖も空もまっ青な夏の湖岸

表紙の写真に寄せて

「夏の伊吹山」

今森光彦（写真家・大津市在住）

伊吹山は、野草の宝庫。今までにどれほど登ったことだろう。山頂のひんやりとした空気にふれると、まだ見ぬ生き物たちに出会える喜びで、胸がわくわくしてくる。ここは、裏日本気候と内陸気候の分かれ目でもあり、北限や南限の生き物が少なくないのだ。夏は濃緑、冬は純白、伊吹山の四季の姿を眺めるのは私にとって、今も贅沢な時間だといえる。



びわ湖

関連号▼25号・36号・41号・58号・78号・89号

総面積674㎢を誇る日本最大の湖。私たちの生活や経済活動に、計り知れない恩恵を与えてくれるだけではなく、心にも癒しと潤いをもたらしてくれる近江の大切な栄養源。しかし、ここ数年、びわ湖を取り巻く状況に危機的な変化が現れている。環境と向き合うことは、今の自分と向き合うこと。びわ湖は、私たちの生活を映し出す鏡でもある。

*部活（ブラスバンド）の朝練で眺めるイメージ。朝早くから豊公園に集まって吹いていました。湖面に映るキラキラした朝日が私の青春です。横でアピルがガァガァ鳴いていましたが。（えみこ・40代）

*びわ湖とその周辺の山々には、滋賀、いや日本中に誇れる、すばらしい自然が残されている。（にゃんこの母・40代）

*小谷山から見下ろすびわ湖は絶景。山頂までの林道は、新緑の季節が最高。毎週違う景色やお花が楽しめました。（のっぱら・30代）

▲西野水道の出口から竹生島を見る

竹生島（長浜市）

関連号▼5号・41号・58号・61号

伝統行事も粛々と受け継がれる神の島。今願うのは、これ以上緑が少なくならないように、ということ。100年後はカワウと共存できる方法が見つかっているだろうか。

*びわ湖の中の島というだけあって、まわりの影響をうけにくく、これからも同じ姿だろうと思う（ただし、北面の森林は除く）。（まこと・30代）

▲豊臣秀吉の御座船を利用して造られたという舟廊下（竹生島宝厳寺）

▲遊覧船から見る竹生島。山の樹木が痛々しい表情だ

湖岸の風景

いつ、どこで、だれと、どんなふうに見るのが好きか、人それぞれ思いは異なれど、これがあるからこその湖北、これに癒されるのが湖北人、といっても過言ではないだろう。

*湖岸から見る夕日は、日本の夕陽百選のひとつ。陽がびわ湖対岸の山間に沈むさまに感動しました。（T・M・30代）

*西野水道をびわ湖側に抜けて北に行ったところ。背中が山、前が湖。人はほとんどいない。あそこで黄昏れるのは至福です。（野良師・30代）

*湖岸道路を犬を連れて散歩していると、いろいろな発見があり、四季を感じることができます。（はたけ・40代）

*湖岸の日の入りの風景のように、生活に追われるなかでふっと立ち止まったときに心あたたまる景色が残っていてほしい。（変わらぬものにあこがれるおばさん・50代）

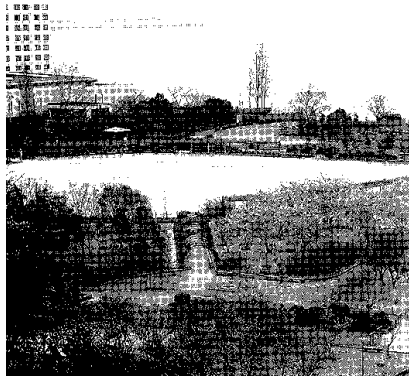
▲ユリカモメとカワウが集まる南浜の浜辺

豊公園（長浜市）

関連号▼76号・77号

明治42年（1909）に長浜城天守閣跡を中心に整備された湖畔の公園。もちろん名前は、豊太閤こと豊臣秀吉公にちなんだもの。長浜城歴史博物館をはじめ、イベント会場としても活用される自由広場、プール、テニスコート、児童公園などがある。長浜城を囲むように約800本のソメイヨシノが植えられ、「日本さくら名所100選」にも選ばれている。また「日本の夕陽百選」のひとつでもあり、びわ湖が赤く染まる様子は圧巻だ。

*子どもの頃の豊公園はもっと賑やかで、サーカス団が来ていたこともあった。小屋の裏のゾウさんをタダ見しに行ったのが懐かしいなぁ。（ゆきくら・40代）



◀長浜城歴史博物館から見る豊公園の桜

小谷城跡（湖北町・長浜市）

関連号▼14号・32号・55号・66号・96号・97号

亮政、久政、長政の浅井3代が、50年あまりの歳月をかけて築いた山城。南北に延びる尾根伝いに曲輪が階段上に連なり、山頂の大嶽には初期の砦がある。堀切や土塁、石垣等の遺構が随所にみられ、往時を偲ぶことができる。国指定史跡であり、日本中に誇るべき山城だ。

▲浅井3代城主・長政が自刃した赤尾屋敷への道

鎌刃城跡（米原市番場）

関連号▼71号・96号

数多くの石垣をもつ中世の山城。近江を南北に二分する国境いに築かれている。主郭や曲輪などをつなぐ道は、まるで鎌の刃のように細い。長年忘れられていた城跡だったが、平成4年から、地元の人びとによって学習や調査が進められ、その貴重な姿が明らかになった。とくに虎口（城の入口）の石垣は圧巻。

＊番場の歴史を知り明日を考える会の活動がアットホームでいい感じ。鎌刃城まつり・のろし駅伝で有名な「石垣団子」とともに、これからも継承してほしい。（たかみ・20代）

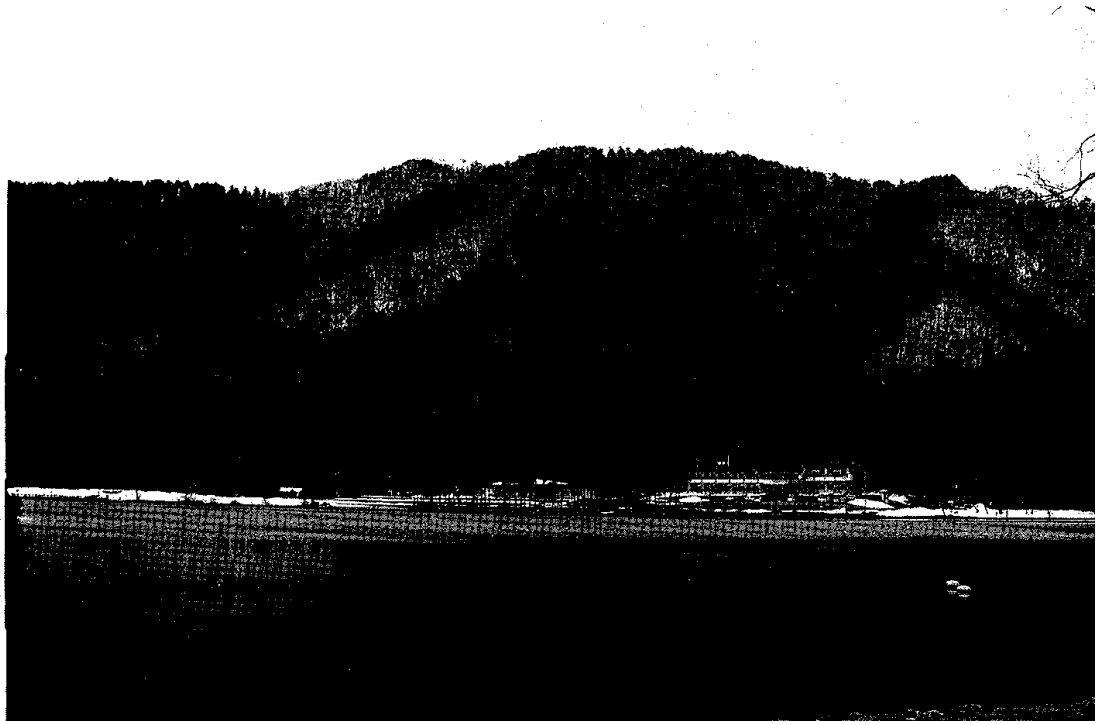
賤ヶ岳古戦場（余呉町、木之本町）

関連号▼33号・38号・42号・86号・96号

天正11年（1583）、羽柴（豊臣）秀吉と柴田勝家の間で起こった戦。賤ヶ岳のふもとの余呉湖畔や賤ヶ岳から続く大岩山など、付近一帯に戦いの遺跡や伝説が残される。賤ヶ岳の山頂からは、びわ湖と余呉湖の両方を見渡すことができる。

＊関ヶ原古戦場とは違ったイメージの戦いは、ロマンをいだかせる。（村上宣雄・60代）

▼七本槍が戦った余呉湖畔から、東岸と大岩山方面を見る



▲堀などがきれいに残る城郭跡に立つと、数百年前に時間旅行しそう

玄蕃尾城跡（余呉町）

関連号▼96号

賤ヶ岳の合戦時、柴田勝家が築いた陣城。北之庄城と長浜城を結ぶ中間点である越前と近江の国境上にあたる。尾根上に曲輪を連ね、通路も複雑に折り曲げられており、攻守ともに優れた縄張りだったが、勝家はこの砦で戦うことなく敗退。今も、土塁や空堀などがよく残っている。

▲地元の人たちの墓地の隣に建立された兄弟の苦むした墓

毛受兄弟の墓（余呉町新堂）

賤ヶ岳の合戦時、北へ敗走する柴田勝家の影武者となって戦った兄弟のお墓。明治になってから、主君を思う心意気に感動した滋賀県の第二代県令・籠手田安定が碑を建造。そのことにも感動を覚える。今も地元の人たちによって整備されている。

京極氏屋敷跡庭園（米原市上平寺）

関連号▼96号・97号

鎌倉時代、佐々木信綱から近江を継いだ氏信を始祖とする京極家。その屋敷跡と庭園は、地元の人たちの整備・保存活動によって、往時の繁栄を偲ぶ歴史遺産となっている。

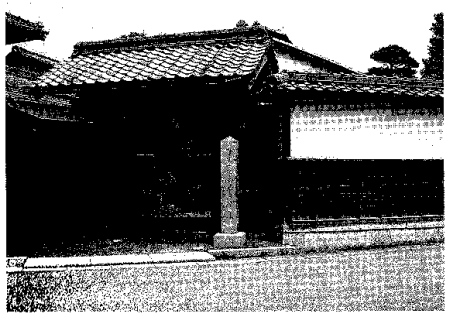
鉄砲の里・国友（長浜市国友町）

関連号▼20号・30号・55号・61号・72号

長浜市の北部、姉川の南側の町。鉄砲が日本へ伝来した天文12年（1543）の翌年から、国友では鉄砲が製造されたという。長篠の合戦では、国友製の鉄砲が活躍した。この町に生まれた国友一貫斎は、日本で初めて反射望遠鏡を製作した人。今から200年近くも前に、自作の望遠鏡で月や木星の観測をしていたというからスゴイ！

＊鉄砲伝来450年祭が行われたのは平成5年の大学時代でした。500年祭は、35年後ですね。これからも国友鉄砲隊の活動とともに伝えてほしい。また、国友の鉄砲鍛冶の火薬技術が生かされた花火も、家族みんなで楽しめる風物詩として大事にしたいものです。（ナオト・30代）

▶広い大名庭園のまんなかにどんと据えられた虎石。藤古川のせせらぎが聞こえる静かな空間



▶国友の中央部にある国友一貫斎屋敷跡。国友鉄砲の里資料館では、本物の鉄砲が手に取れる